

日本現代文
全集
第77

島村抱月長谷川天溪
片上伸・相馬御風
集

日本現代文學全集 27

島村抱月
長谷川天溪
片上 伸
相馬御風
集

講談社

日本現代文學全集

27

島村抱月・長谷川天溪 集
片上 伸・相馬御風

編 集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷
昭和43年9月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著 者 島 村 抱 月
長 谷 川 天 溪
片 上 伸
相 馬 御 風

發 行 者 野 間 省 一
發 行 所 株 式 會 社 講 談 社

裝 幀 蟹 江 征 治

印 刷 東 洋 印 刷 株 式 會 社
製 本 藤 澤 製 本 株 式 會 社

東京都文京區音羽 2-12-21
郵 便 番 號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振 替 東 京 8 - 3 9 3 0

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

島村抱月集 目次

卷頭寫眞
筆 蹟

運命の丘……………七
 清盛と佛御前……………三
 審美的意識の性質を論ず……………三
 囚はれたる文藝……………三
 沙翁の墓に詣つるの記……………三
 「破戒」を評す……………三
 近代批評の意義……………三
 「青春」を評す……………三
 今の文壇と新自然主義……………三
 知識ある批評……………三
 「蒲團」を評す……………三

文藝上の自然主義……………一〇
 自然主義の價值……………二二
 藝術と實生活の界に横はる一線……………二三
 序に代へて人生觀上の
 自然主義を論ず……………二三
 懷疑と告白……………二五
 批評に就いて……………二四
 「人形の家」とイブセンの作劇術……………二四
 メーテルリンク論……………二四
 自然主義運動の意義……………二五
 作品解説……………瀨沼茂樹 二二
 島村抱月入門……………紅野敏郎 二六
 年 譜……………四六
 參考文獻……………四三

長谷川天溪集 目次

卷頭寫眞
筆蹟

美的生活とは何ぞや……………一五
 新思潮とは何ぞや……………一五
 「重右衛門の最後」(花袋作)……………一六
 不自然は果して美か……………一六
 解決なき創作物……………一六
 批評の本領……………一七
 研究的精神の缺乏……………一七
 文學の試験的方面……………一七
 理想の破滅と文學……………一七
 幻滅時代の藝術……………一七
 寫生文の妙趣……………一八

反基督教的的精神……………一八
 論理的遊戯を排す……………一八
 現實暴露の悲哀……………一九
 所謂餘裕派小説の價值……………二〇
 自然派に對する誤解……………二〇
 無解決と解決……………二一
 現實主義の諸相……………二二
 藝術と實行……………二三
 自己分裂と靜觀……………二三
 作品解説……………瀨沼茂樹 二五
 長谷川天溪入門……………紅野敏郎 三〇
 年譜……………三〇
 參考文獻……………三三

片上 伸集 目次

卷頭寫眞
筆蹟

無解決の文學……………三三
 人生觀上の自然主義……………三三
 新興文學の意義……………三三
 田山花袋氏の自然主義……………三三
 自己の爲の文學……………三三
 自然主義の主觀的要素……………三三
 アーサー・シモンズ論……………三三
 快樂主義の文學……………三三
 イエーツ論……………三三
 幻滅の眞の悲哀……………三三
 緊張充實を欲する文學……………三三

生の要求と藝術……………三六
 強い執着深い味ひ……………三六
 告白と批評と創造と……………三六
 生みの力……………三六
 近代文學に對する疑ひ……………三六
 文學思潮の一轉期……………三六
 階級藝術の問題……………三六
 現代日本文學の問題……………三六
 現實觀の成長……………三六
 内在批評以上のもの……………三六
 文學の讀者の問題……………三六
 現實觀の動搖……………三六
 作品解説……………三六
 片上 伸入門……………三六
 年譜……………三六
 参考文献……………三六
 瀨沼茂樹……………三六
 紅野敏郎……………三六

相馬御風集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

自然主義論に因みて……………三三
 文藝上主客兩體の融會……………三九
 「蒲團」評……………四一
 詩界の根本的革新……………四五
 「有明集」を読む……………四八
 自然主義の絶對境……………五一
 北村透谷私觀……………五八
 自然主義論最後の試練……………五九
 ツルゲーニエフ、態度、人……………五七
 樋口一葉論……………六一
 懷疑と徹底……………七一

德富蘆花論……………三七

小川未明論……………三九

生を味ふ心……………三九

現代藝術の中心生命……………三九

自我の權威……………四三

大杉榮君に答ふ……………四九

作品解説……………瀨沼茂樹四六

相馬御風入門……………紅野敏郎四四

年 譜……………四六

參考文獻……………四六

島村抱月集

に伸びるゝすれば、寧ろ大きく伸び得る
風格である。同時に、一歩を誤れば、全く非凡

~~無~~常初の表面に流れてしまふ
かも知れない。

結局真に感じ、廣く観、細かく描く基礎は既に
此の作で築かれて居る。最大事は此れを一層
深く観、深く感ずる工夫である。茲にけの作
者の前途が横ばるのである。

明治四十四年五月

島村抱月批

運命の丘

人

ナポレオン (四十四歳)

ダリユー (五十歳)

ミュラー (四十二歳)

モルチエール (四十五歳)

アンドレー (三十歳)

韃靼人二人

將校下士従卒其他

場所

モスコウ市外

時代

千八百十二年九月十四日の午後

第一場

モスコウ市の西南、雀が丘の一部、丘の頂を舞臺の前面に現はして、背後は一面にモスコウの市街を見下した景色、秋日和の午後二時頃の日光が強くモスクワ河に反射してゐる。市内すべて本文にある通りの景。

軍服のナポレオン、馬を籠に乗り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つかつかと小急ぎに下手から丘の頂に現はれる。續いてダリユー、モルチエール、アンドレー及三四の將校従卒等登場。

(ナポレオン、モスコウの市街を見るや否)

ナポレオン モスコウー モスコウー

(叫んで尙熱心に向うを見てゐる)

ダリユー モスコウだー モスコウだー

(他の人々も之れに和して、競うて市街の方を見る)

そら見給へ、あれがモスクワ河だ。其の向うがクレムリンさ。丸

の内だ。綺麗ぢやないか。

モルチエール なる程、これや綺麗だ。まるで古い繪本が抜け出し

たやうな町だな。

ダリユー あの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も

違つてるね。東洋的ぢやないか。其の前を、まるで灰色の熊が馬

に乗つたやうなコザークめが、木材を横たへて通る所は似合つて

るな。配合がいゝぢやないか。

アンドレー 北國に似合はん明るい町ですな。空氣も實に澄んで

る、たしかに神聖な町といふ感じがしますな。

モルチエール 眩しいやうだ。金の十字架が、まるで星を散らした

やうに光つてるぢやないか。あれが皆んな寺だらうか。寺の多い

處だな、外郭も内郭も、見給へ、町の半分は寺だが、尖塔がまる

で雜木林のやうに並んでる。其の一本々に金の星がかゝつてゐ

るのだ。

アンドレー 寺院ばかりが三百近いでせう。それから處々新月の徽

章も光つてゐます、マホメタンの寺でせう。斯うなると壯觀です

ね。十字の星と新月が此の古い街の空に撒いたやうに浮んでる。

これだけでも胸が躍りますね。あれが此の町の命なのだ。命のサンボルが、あゝして光つてるのだ。平和ですね。つい、そこいらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空気が、茲へ来ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。其の中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてる所は、成るほど女性的ですね。ロシア人は此の町をおつ母さんと言ふさうだが、私等には美しい尼さんといふ感じですね。

モルチェール 處々随分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな處だ。何うしても繪本だ。是れが本當にモスコウなのかなあ。夢のやうだ。

(飽かず市街を見てゐたナポレオンは此の時初めてこちらを向き、近くに立つて居るモルチェールの肩を軽く叩いて)

ナポレオン おいー

モルチェール はッ！

(皆一齊に其の方を向く)

ナポレオン モスコウへ来たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチェール 陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレオン 夢ぢやあない。本當のモスコウへ来たのだ。到頭来たのだよ。

ダリユー 夢が事實になつたのですね。

ナポレオン お前にも似合はん事を言ふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。俺がパリでセギュール伯に言つて聞かせたのはそこさ。俺には初からモスコウは目に見えて居た。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリユー 陛下の其の筆法によりますと、モスコウは陛下の運命でござりますね。

ナポレオン 運命だ、全く運命だ。俺には是非とも一度此のザール

の城へ来なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコウは私の戀人だ。古い／＼前世からの戀人であつたのだ。先つき一目見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懐しい戀人を人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

(振りかへつて復た市街の方を見を)

ダリユー 前世からの戀人ですね。約束されたる土地ですね。人生にはたしかさうしたものがありません。

アンドレー 併し閣下、前世からの戀人といふやうな者は、こんな北の暗い國へ来てこそ道理と思ひますが、フランスには、少なくとも女にさういふものがござりますまいね。明るい國の人間は淺い戀をします。其の代り急です。底まで透き徹つた小川の瀬のやうに、急な思ひをするのが、フランス人の習ひでございませう。

モルチェール 此處で女の話なんか怪しからんな。

ダリユー フランス男は戦をしながら戀を論ずるさ。

モルチェール 戀を論ずるもいゝが、早く陛下をクレムリンへ御供したいものだな。

アンドレー ミロラドヴキツチ少將が歸つてから、彼れ是れ二時間近くなりませう。もう、町の使節が来てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい、今やつと敵軍の後衛が町を出はづれました。あの森の蔭に續いてるのが其れです。あれでクツーゾフ元帥の率ゐて居られる九萬がすつかり退却した譯です。

ダリユー やあ、ミユラー將軍が市街の入口で盛に歓迎せられてゐるぞ。貧民どもが珍しさに集つて來るぢやないか。まるで觀せ物扱だ。

ナポレオン クレムリン！響のいゝ言葉だ。あの邊が宮城だらうな。おい！地圖を見せないか。

(アンドレー、市街の地圖を披いて捧げる。ナポレオン、手に取つて見て)

ふむ。

(顔を上げ、また市街を見入つて)

あれだ。クレムリン、クレムリン。俺はあの宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロンには、さうく、イタリヤから磨かせて来た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后とが並んで腰をかけて居た。あのアレキサンドルの神經質らしい顔は、決して憎い顔ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりた
いと思つた。

(直立して凝視してゐた將校等互に顔を見合はせる。ナポレオン、顧みて)

ねえ、さうだらう？ 全くルツスは憎くない國民だと思はないか。俺は好きだよ、俺は。

モルチエール 全く憎さげの無い國民でございませぬ。のろつとして居て、素直で、勇敢で。

ダリユー いや、我々の脈管に流れてゐる血が同じセルトの源だから……

アンドレー それもさうでせうが、一方から言ふと寧ろ違つてゐるから相惹くのかも知れません。異性相惹く道理ですね。永い間冷たい外部の壓迫で、反抗的に沸いた彼等の血は、永久に熱いのです。所が、自然が温めて呉れた我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が西南の人であるといふ理由で、此の東北の神秘な國民を慕ひたいと思ひます。

モルチエール は、君の言ふことは、あんまり感に入り過ぎて可かんよ。第一我々は征服者だぜ。強きものが弱きものを愛する關係だぜ、忘れちやあ可かん。

アンドレー ですが、愛は強い弱いの關係ではありません。

モルチエール は、生意氣を言ふなよ。

ダリユー まあいゝさ。若いからなあ。戦をしながら戀を論ずる筆法だらう。ねえ、君。

(ナポレオンは地圖を巻いて手に持つたま、そこらを大腿に往つた

り來たりして居たが、寄つて來て)

ナポレオン まだ來ないか。遅いぢやないか。

モルチエール もう來さうなものでございませぬ。おい君、一つ偵察にやつて呉れ。

アンドレー は。

(下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る)

ダリユー 陛下はお疲れであらうから、そこらへ假りに何したら何うだらう。

ナポレオン 要らんく。俺の顔に疲れが見えるか。

ダリユー いや、お顔色は却つて益々活氣を帯びて參るやうでございませぬが、何にしても一週間以來のお疲れでございませぬから。

ナポレオン 俺には疲労といふ事は無い。此の眼の輝くのは、それ、運命が眼の前に來たからさ。此の晴れた空に、此の壯麗な景色を見て、興奮せずに居られるか。ダリユーなぞも顔色が違つて來たぜ。つい先つきまで君等の顔にはポロディノの影が粘りつて

ゐた。死の影がついてゐた。それが今ちやモスコウの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍つて居る。今にクレムリンの城へ這入つたら、君等が一番がけに何をするだらうな。モルチエールは何が欲しいか。

モルチエール 久しぶりで善い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンドレー 私は先づ静かな部屋に引込んで、この興奮の心の褪せない内に日記をつけたいものでございませぬ。

ダリユー 私もそれに賛成。

ナポレオン さうく、ダリユーは歴史家で詩人だつたな。

ダリユー 「だつたな」は恐れ入りました。

ナポレオン 忘れて居たのだよ。

ダリユー 忘れられて少しも恨みはございませんな。私なぞは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなものですから。

ナポレオン は、悟つたね。

ダリユー 却つて此のアンドレー君などが十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

ナポレオン ふん。若い者の時代か。俺なぞはダリユー、どちらの組か、若い方か古い方か。

ダリユー さやう……陛下は勿論私なぞよりも若くていらせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレオン 其の譯は？

ダリユー さやう……十八世紀の纖弱な冷たい文明に對して、強い

熱力の要求が陛下のお體に權化けんかしたと申したら、如何でせうか。

ナポレオン ふむ。併し其の力は何處から來るだらう。私に言はずれば運命だ、運命！ 力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つて貰ひたい。

アンドレー (進み出でて)

陛下、陛下、私は唯今の瞬間に於いて、陛下に神仙の如き高風を感じます。運命の權化！ 何といふ深いお言葉でございませう、手が此の通り感激に顫ふるへて居ります。何うか握手を願ひたうござります。

ナポレオン よしく。

(微笑しながら固く握手する。其の途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆々愕然として其の方を向く。ナポレオンも俄に正氣づいたやうに屹となる。)

モルチエール あれだ。外郭に接した東の處に煙が上つてゐる。何事だらう？ うむ。騎兵が這入つて行くやうだから、今に分るだらう。是れや長く斯うして居るのは危険かも知れんよ。使節は何うしたのだらう？ 何うして遅いのだらう？

(一同無言で、待遠しい様子に市街の方を見る。ナポレオン、こちらを向して)

ナポレオン 今に來る。屹度來るよ。先つきの報告はまだか。もう

一度偵察にやつて見い。

アンドレー は。

(再び下手へ行つて令を傳へる。)

ダリユー 町が段々靜かになつて來るやうに感ずるが、謹まかねえ。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな感じがする。見給へ、馬鹿に森もりとして來たぢやないか。河の瀬の音が聞える。

モルチエール は、生の町がまた死の町になつたかな。モスコウがポロディノになるのかな。

ナポレオン (モルチエールの方へ鋭い一瞥を投げて)

馬鹿ツ！

モルチエール (姿勢を正してナポレオンの方へ向き)

陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戰地といふことを忘れたくないと思ひます。モスコウに何時敵軍が現れても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以てまだ確實にモスコウを占領したとは思つて居りません。

(ナポレオン、無言のまま往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まつい心持が流れ込む。しばらくして)

ナポレオン 分つたよ、分つたよ。併し私はもう確實にモスコウを占領したつもりで居るね。先つきからクレムリンの宮城で、大夜會を開く手筈まで考へて居る。二百九十五寺といふ夥おほしい寺の坊主どもを集めて諭してやらうと、其の演説の腹案まで拵へた。寺の建物には、残らず大きな字で *Maison de Dieu* と彫りつけさせてやらうと考へた。此のモスコウには、お前等のうち誰を總督にしようかとそんな事まで考へてゐる。モスコウ占領！ もう動かん事實だ。夢ぢやない、夢ぢやない。

(言つてちつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。此のとき一同の胸に一種の不安が萌もす心持。やがてナポレオンはそこを歩きはじめ)

ダリユー もう何時だらう？ 日があんな方へ行つたね。何うだらう、兵をやつてロストブチン總督を連れて來させては。

モルチェール 何うもそれがよくはないかな。暗くなると面倒だぞ。先つきの爆聲が何か意味があるのぢやなからうか。

(ナポレオンはまた市街の方を見て沈黙してゐる。日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黒んで來る。間を置いて)

アンドレー あゝ、來た〜！ 報告を持つて來た。

(騎兵一人、飛び下りて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。

手早く開いて)

アンドレー あゝ、是れは先つきの爆聲に關聯した事です。

(急いで讀む内に顔の色がかはる)

是れは怪しからん。大事件でございます。

(皆々驚いて聞耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる)

ロストブチン總督が囚徒を悉く解放した様子で、其の一人が先程の爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場處はドロゴミロフの門に近い市街の空家で。爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で舉動不審な一人の韃靼人を捕縛したのださうでございます。

モルチェール 其の韃靼人を調べて見たのか。

アンドレー 取調べたが更に口を開かないとあります。

モルチェール それや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちやいくまい。

アンドレー 勿論やつてるやうです。

モルチェール それから其の捕縛した韃靼人は連れて來たのか。居るならすぐ此處へ連れて來いつて。通譯を附けてな。

ナポレオン なあに心配するには及ばない。大勢はもう極まつてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追つ放してやれ。

モルチェール でございますが、此の際注意しませんと……

ナポレオン いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらう

よ。偶然の事だ、恐るゝに足らん。

(立つてゐる騎兵に向つて)

さう言つて行け。

(騎兵敬禮をして引きかへす)

それよりか、一方の様子は何うだ。一向に報告が來んぢやないか。誰れか此の内で行つて見い。

アンドレー 私が参りませう。

(敬禮をして行かうすると時第二の傳令來る)

おゝ、報告か。

(下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛び下りた士官、あわてた様子で、聲を潜めて話す。アンドレーの顔色また〜變る。他の二人も寄つて來て報告を聞き、顔を見合はす。ちよつと密話をして、ナポレオンの方を振り向くと、立つて鋭く皆の方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわてて他を向く。同時にアンドレーがつか〜と群を離れて進み寄り、頭へた聲で)

陛下！ モスコウは空虚でございます！

ナポレオン えゝ？ モスコウが空虚？

アンドレー はい、空虚でございます。

(ナポレオンは聞くと同時にアンドレーの上に投げた鋭い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のままちよつと見てゐる。顔の色變る。アンドレー其他、皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顔を見つめて、身動きせず。しばらくの間、森として聲無き氣持)

ナポレオン 馬車を持つて來い。

(士官の一人走り去ると、跡からナポレオン大股につか〜と丘を下手に降りる。皆々沈黙のまま續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく薄れて残る)

第二場

モスコウ市の一方の入口たるドロゴミロフの見附が夕日を負うて遠見に立つてゐる。路傍の土手上の景。衆も髯も蓬々と伸び、垢まびれの顔の蒼白く寝た鞆鞆二人、土手に腰をかけ、下の路からかけて向うの方を眺めてゐる體で幕上。

甲 一體どうしたと言ふんだ。馬鹿に騒ぎ出したぢやないか。

乙 町へ這入つて來ると言ふんだらうよ。

甲 それにしてもお前をよく放免しやがつたなあ。よつぱど言ひ抜けがうまかつたと見えるな。

乙 俺は言ひ抜けなんかしやしねえ。ただ言葉は一切鞆鞆話のほかは分りませんといふ風をして黙つて居ただけさ。なあに、俺の體はどうせもう、持てあましてる體だあな。殺さうが活さうが、悲しくもなけれや、嬉しくも無え。總督さんに頼まれたから、火だけはつけてやるが、つけねえかも知れねえ。どつちだつていゝ事だ。

甲 だつてお前、同じロシア人だな。頼まれた以上は……

(向うを見て)

あゝ、通るゝ。あれがナポレオンだらう。來ねえゝ。行つて見ようよ。

(甲が乙を引つ張るやうにして後へ降りる)

——(舞臺廻る)——

第三場

ドロゴミロフの見附前、夕暮の光景、門の兩側に數人の衛兵が立つてゐる。路を離れて前場の鞆鞆二人及び貧民體のもの三四人まばらに

立つて見てゐる。

ナポレオンは馬車を降り、徒歩で、第一場の人々を従へ、ミュラーに先導せられて門の前まで來る。

ミュラー 是れがドロゴミロフの見附でございます。御命令で兵は總で一足先に市街へ入れて置きました。

(ナポレオンは、見附の入口でばかりと歩を止め、石門を見上げて立つてゐる。皆々一樣に立止まる。しばらく無言)

ナポレオン もう是れでいい。此の門さへ見れば、私は満足だ。今夜は私は引きかへして此の村へ泊らう。ミュラーは市街の方を氣をつけい。

(言つてすたくと跡へ歸らうとする。皆々驚く。ミュラー、急いで其の前に立ちふさがる)

ミュラー 陛下、それはまた何うした譯でございます。こゝまでお出でになつて引つかへすと仰しやるのは意を得ません。縦ひ市民は遁走しても、市街と宮殿とは残つて居ります。陛下、是れが此の大戦争の目的地たるモスコウの町でございます。是非お這入りを願ひます。申すまでもなく危険は少しもございません。ミュラーが身を以てお守り申して居ります。危険をお恐れになる陛下ではない。此處からお引つかへしになるといふ法は、斷じてございません。

(ナポレオン、再び門の方を向いて、見上げたまゝ、黙して答へず)

モルチェール ちよつとでも、クレムリンの宮城へ陛下がお這入りになれば、一般の士氣が振ひます。

アンドレー 陛下はモスコウの町に這入るのが運命だと仰せられたでございますか。其の通りになつて參つたのです。躊躇なさる理由はございません。

(熱心に進み寄つて)

運命！ 運命！ 陛下、運命の門はこゝに開いて居ります。たゞ一足です。クレムリンの門も開いて居ります。我等、フランス人

の手で明けて待つて居ります。あれ程待ち焦れておいでになつたモスコウへ來たのでございませんか。陛下は運命の權化だと仰しやつた、あの豫言が今一足で充されます。よしロシア人は一人も居なからうが、フランス人のモスコウで結構でございませんか。何うかお這入り下さい。陛下、我々がお手を取りませうか。馬車にお召しなさいませうか。

ナボレオン (ぢつとアンドレーの顔を見て、ヤゝ深ぐみ)

運命！ 運命！ 運命の門！

(アンドレーの肩に両手をかけ)

空虚なモスコウ！ 空虚なクレムリン！ はゝ、はゝ。

(絶望的に笑ひすて、すたくと門の中に這入る。皆々驚いてついて這入る。跡に衛兵も見物人も居なくなると、先程の韃靼人二人門の前に進み出で、人々の這入つた跡を見送つて)

乙 運命の門だよ。

甲 這入つて行つちやつた。

乙 は、は。

(乙が氣の無い笑ひを一聲したまふ、二人とも口を明き、窪んだ眼を一杯に見ひらいて、無意味に門を見て居る。日が暮れて行く)

——(幕)——

(モスコウはフランス人にはモスクワであらうし、クレムリンはロシア人にはクレムリださうである。又ダリユーは實際は此の時四十六歳であつた。是等は舞臺上の聲音の便宜や筋の便宜で詩的特權の自由を用ひた。)

(明治四十四年四月「早稲田文學」)

清盛と佛御前

序言

此「清盛と佛御前」は數年前單に「清盛」と題して本誌(「早稲田文學」)に掲げたものを、一昨年一度其の第二幕だけ改作して本誌に再掲し今回いよゝ藝術座大正五年度の春季興行に上演する目的で改めて第一幕第二幕とも殆ど面目を一變するまでに作り直したのである、此たびは第一回を一月二十四日より大阪中座、京都南座、神戸聚樂館で開演し三月二十六日より東京帝國劇場で開演することになつてゐる、其の役割は、

佛御前(二十四五歳) 松井須磨子

清盛(六十歳位) 澤田正二郎

宗盛(三十四五歳) 中井哲

叡山の法師順念(五十歳位) 宮島

同西念(三十歳位) 小川洛陽

安部資成(三十歳位) 中田正造

大夫判官季貞(二十七八歳) 宮城千之

侍士(二十三歳) 花田幸彦

妓王御前(二十三歳) 三好榮子

侍女 澤井嘉枝

侍女 磯野不二子

尙、此の劇の舞臺面、衣裳道具其の他詳細のことは、大正二年五月植竹書院發行、「影と影」と題する私の著作集に收めた初作による、

大正五年二月

人物

平清盛（六十二歳）
 前右大将宗盛（三十四歳）
 佛（二十歳）

妓王（二十二歳）

安部資成

大夫判官季貞

叡山の法師二人

侍士三人

侍女三人

場所

京都、西八條、清盛の邸

時

治承四年三月十六日、午後より夜に及ぶ

第一幕

上手半面、横さまに一段高く腰殿の一部を現はす、室内の調度は、すべて平安朝の優麗高貴な好み、正面の半を白地薄模様の襖で仕切り、其の奥には、遙か離れて上手から下手へ打ちわたした細殿が脛縁ごしに見える、下手から奥へかけて中庭の景、庭の中央に櫻の大木二三

株、花が丁度眞盛りである、遅い午後の光線が、おつとりとした暖い色にあたりを包んでゐる、

素絹奴袴で脇息に倚つた清盛を上座にして、一方は薄紅梅の小打着に袴の妓王、及び侍女、法師、一方は侍女、資成、季貞、侍士等宴席の體に居並ぶ、銚子高坏の外、妓王の前に箏を置き、琵琶、笛、鼓等管絃の樂器をそれぞれ資成、季貞、侍女、侍士等に割りあて、暫時管絃樂の中に、靜かに暮を揚げる、やがて奏樂止むと、

清盛 やあ、御苦勞々々々、御坊は鼓も上手と聞いたが、なか／＼管絃のたしなみが深いと見える、

法師甲 お恥かしい手すさびでございます、もつとも此のごろ叡山の法師仲間には琵琶や鼓を弄ぶことが流行でござります、

清盛 結構ぢや、私も管絃の遊びはすきぢやが、併し御坊、管絃が面白いといふのは、あれはみんな聞く人の心がらぢやなう、自分の身がおもしろければ、聞く音樂もおもしろい、自分の身が悲しければ、聞く音樂も悲しい、此の世は天晴淨海が世ぢやと思ふと、其の心をしらべて呉れるから管絃の音までが浮立つて面白く聞かれる、御坊などは、いつも菩薩や天女と往來して居るから自然と管絃の音が極樂淨土の音樂に聞えるであらうな、

法師乙 は、は、それ程でもござりませぬ、斯うして三法に身を捧げては居りますが、やはり肉身の息は通うて居ります、極

樂淨土の音樂よりも、此の世の女菩薩方の爪音の方が眞身にこたへて有りがたいと思ふ時もございます、

清盛 は、は、御坊も、腥坊主の方ぢやな、

法師乙 是れは恐れ入りました、入道さまのお仕込で段々人臭い息が通うてまゐります、しかし入道さま、當節の法師づれば、昔と違ひまして、みな元氣ものばかりでござります、口でこそやれ淨土ぢや穢土ぢや極樂ぢやと申しますが、内心では未來の淨土よりも、此の世の穢土の方が大すきな手合ばかりでござります、殊にかうして美しい女菩薩方のお酌で一こん頂いて、よい心持になつ